

竜・白虎・玄武（スザク・セイリウ・ピヤクコ・ゲンブ）の四神像がある。朱雀はうみへび座、青竜はさそり座、白虎はオリオン座をあらわし、北方の七星宿（セイシュク）を示す玄武は亀と蛇とのからみあった奇怪な文様に画かれる。その姿がソ連エルミタージュ博物館蔵の蛇と野獣との闘争文様に連想を定着させる。

青木木米（モクベイ）の画く南極老人星、法隆寺の星マンダラ、スキタイ展で見た羅睺・計都（ラゴウ・ケイト）像一と考証は日本・中国・シベリヤ・インドにおよび、仏教・道教・ヒンズー教にわたる。このことは天文を深く愛し、古典語に通じ、仏典・漢籍・故事来歴に通曉した抱影先生をまっぴらに始めて可能となったのしい本である。長崎崇福寺の媽祖（マソ）堂から、マカオの

媽祖閣、そして馬祖島の媽祖廟、そして馬祖火（セントエルモの火）と話の転ずる件りは、気のきいた探偵小説よりも面白い。

何よりもこの本をいきいきと支えているのは抱影先生の「ものを見る目」のたしかさであり、該博な知識の根底に常にみずみずしく躍動する詩人的確な直観力である。

天文→宗教→古美術を通して、結局は「人間への愛情」を語るという点では、この本は昭和11年、そして昭和32年に決定版を上梓した抱影先生のライフ・ワーク「日本の星」の延長線につながり、その「ものを知る」ことよりのこびを手にとって教えてくれる力作である。

（石田五郎）

第 3 回 天 文 教 育 懇 談 会 報 告

日 時：1971年5月20日13時10分～15時45分

場 所：学会会館分館2階第2号室

出席者：天文台職員、高校・大学教員、社会教育施設職員、大学生など13名

テーマ：天文用語について

まず佐藤（電気科学館）が現行の天文用語9個とその改良試案とを併記したビラを黒板に張り、皆で討議した後、平瀬（戸山高校）が全員に配布した高校の「天文教育用語集」について、天文用語を検討した。

「用語集」には審査基準として

1. 天文教育用語とは、小学校から高等学校までの教科書に使用、または近い将来使用される見込みの天文用語を指す。
2. 用語は耳で聞いてまぎれやすくないこと。
3. 発音しやすく、耳で聞いても感じがよいこと。
4. 広く用いられている用語で適当なものはできるだけ採用する。
5. 漢字で当用漢字表および当用漢字音訓表にないものは、同音あるいは同訓の漢字で書き換えるか、かな書きにする。
6. 漢字で書くよりも、かな書きの方がわかりやすい用語はかなにする。
7. 外国語で適当な訳語のないものはかなで書く。

とある。第1項について、下小田氏（愛知教育大）から、専門用語と独立に教育用語というものがあるのではないかという指摘があった外はおおむね承された。以下、討議された用語について述べる。

離角——内惑星が太陽から最も離れたとき（時刻および現象）を、理科年表でも最大離角と書くが、そのときの角度も同じ語を使うのでまぎらわしい。前に使われてい

た離隔と離角の意味を使いわけるときである。離隔は「離角の位置」または「離角の時刻」というとよい（平瀬）という意見も出た。

galaxy——銀河系外星雲・島宇宙・小宇宙などいろいろに呼ばれているが、最近では銀河とも呼ばれるようになった。しかし、これは天の川を基準とした銀河面、銀河座標、銀河赤道などと混乱を起こすし、銀河系を星雲団と間違える恐れもある。系外星雲がよかろうということになったが、よりよい用語は将来に残された。

放射——物理学用語審議会が輻射を放射に改めたため、輻射圧は放射圧、輻射等級は放射等級と書かれることになった。したがって太陽放射といえば微粒子放射（corpuscular emission）も電磁波（electromagnetic radiation）も共に含まれることになる。これは科学の細密化に逆行する措置であるが、検討は物理学会に委ねることになった。

磁変星——変光星に準じて変磁星と書くべきではないか。外に報時と時報という例もある（水野：五島プラネタリウム）。

星食——掩蔽という字は当用漢字にないので日食・月食にならって作られたものだが、生物学の生殖と同音なのでよくない、現象に応じて恒星食・惑星食と使い分けはどうかという意見もあったが、星の食と言っては（村山：国立科学博物館）という意見には賛成が多かった。カクレンボは教育用語としては不適當ということになった。実視——実視等級、実視連星などとして使われるが、実視観測よりも眼視観測の方がびったり来る（村山）。しかし、よく普及しているのでこれでもよかろうということになった。

傾斜——軌道傾斜・黄道傾斜などとして使う。傾角の方

が適当だが、計画と同意だし、傾斜の方が普及しているからこれでよい。

南中——子午線の上通過のことであるが、天頂より北で南中するというのはおかしい。南半球の国に行けばなおさらである。それで近頃では正中という用語も使われるようになった。北村氏(大阪府科学教育センター)は、南中という語は教員研修の場合に研修者を混乱させて困ると言われた。なお子午線の下通過を北中と言うのはやめべきだという意見もあった。

この日の討論では時間が足りないので、用語集の中の用語についての各自の意見を文書にして8月末までに平瀬に送り、平瀬がこれを整理し、豊橋における秋季年会では用語の問題をさらに煮つめることになった。

なお懇談会へ出席するための招待状が欲しい場合は、返送料をそえた招待状を学会に送れば、学会の印をおして返送してくれるとのことである。終りに、懇談会開催について種々御配慮をいただいた青木信仰理事に感謝の意を表す。
(平瀬志富, 佐藤明達)

天文学の裏方さん—東北大学天文学教室の巻—

付属観測施設を持たない当教室の場合、舞台の規模は小さいが、走り使から掃除、教室事務、図書や文献交換の仕事、計算・複写・タイプなど研究補助的な仕事やこまごました機器の面倒など、教室の研究教育を支える舞台裏の力は重要である。不完全2講座という現状は、このような裏方さんの定員にこと欠く次第で、大先生さえ自ら裏方さんの役をされることは、当然室の特色のひとつであるが、ここでは研究者以外の方について書きしるし、その労を讃えたい。

1945年太平洋戦争後半、大学は学徒動員で角帽姿の学生はまばらであったが、女子研究補助者の姿は圧倒的に多かった。人呼んで女子大学といわれるほどであった当時、齋藤さん、愛沢さんの二人のお嬢さんが、先代松隈教授の周期軌道、シュミットカメラの理論計算の研究を手伝っていた。手廻わしの卓上計算機で終日ガラガラと轟音を立て、B3版の方眼紙の隅々まで数字を埋めてゆく、今日からすればまさに名匠の業である。計算の合間には、お茶汲みからクロノメータの ΔT 調べ、写真までとレパートリーは多かった。小生も計算機の回かし方を教わった一人であるが、間もなく結婚のため退職されたと記憶している。

1946年7月仙台空襲は、図書室・書庫を除いて研究室はすべて灰燼に帰した。永野勝さんはこの頃から3年間教室の仕事を手伝ってくれた。南国育ちの目のくりくりした音楽科(ピアノ)専攻のお嬢さんである。戦災図書目録、物品整理にとりくみ、手まめに完備して現在の目録の基礎を作ってくれた功績は絶大である。この頃は敗戦と終戦後の食糧事情の最も悪い時代である。当時評定河原の現グラウンドは、大学菜園となっていて、当教室割当て区画の栽培から収穫までの仕事も、裏方さんの重要な仕事であった。M教授の屋敷の雑炊作りも彼女の欠かせない仕事であった。復員してくる研究者を加えて、当時の教室若手は、ウィットに富んだ口の悪い連中が多かったので、彼女もこの面で訓練されたようだが、果たして現在家庭にあってプラスになったかどうか?

1949年から1957年までの9年間は、紅零点裏方さん不在であった。1958年講座が増設され、萩原教授を迎えて、当時文学部学生だった須川昭子さんが、アルバイトで約1年間秘書役をつとめてくれた。その後をうけて、高橋寿子さんが1960年までの2年間を、教室の雑用を一手に引き受けて活躍してくれた。おおらかな彼女が教室全体にもたらす影響も少なくなかった。定員の関係で1961年から工学部に移り、現在も活躍されている。

1965年春から千葉せつ子さんが手伝ってくれた。一見華奢な彼女も、トラックにブロックを積んで運転する力量の持主で、運動神経に乏しい教室のメンバーには欠かせない貴重な存在であった。阿武隈川の南に住む彼女の自家産のいちごや果物は、しばしば我々の御馳走になるところで、その味とともに想い出がつきない。1969年春退職、それも今度は天文学研究者の裏方さんとして結婚のためというわけで、この事実をもってしてもいかに彼女は有能であったか御賢察いただけることと思う。なお1966年には、中村保子さんがパートタイマーで1年間図書の仕事を手伝ってくれた。

千葉さんのあとを、村上洋子さんが1970年2月まで引継いでくれた。明朗快活どんな仕事もひとつ返事でこころよく引受けて働いてくれた。彼女はどんな話でも、大いに感心して聞いてくれるので、ときにはあらぬことをまことしやかに、彼女をかついだ人も教室にはいるようだ。現在国立身体障害者センターで、彼女の天分を生かして活躍されている。

限られた紙面と、筆者のおぼろげな記憶で、失念したり十分に書きつくせないことが多いが、ここに感謝の意を表したい。現役の裏方さんについての詳しい紹介は、つぎの機会もあることかと割愛させていただいた。年々増加する学生・院生・研究生を含めて、裏方さんの仕事は増大の一途をたどっているが、現在田所与志子さん(1961年より事務官)、大坂瑠子さん(1967年より事務補佐員)、佐藤幸子さん(1969年より事務補佐員)の3人の方が奮闘しておられる。
(氏家慧一)